

自然観察 NOW

NO : 31

野幌森林公園自然情報

発行 : 2018年8月9日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

ホームページ <http://voluran.com/>



野幌丘陵（野幌森林公園）の歴史

本年は北海道命名150年ですが、候補名を提案した松浦武四郎は蝦夷地を6回訪問しています。その内、少なくとも3回は現在の野幌森林公園の近辺を通過しています。その時の武四郎の胸中を推察しながら野幌森林公園の概歴を検証してみましょう。

草創期

明治2年開拓使が設置され、野幌付近の調査の結果、面積5,607ha（現在の野幌森林公園の約2.7倍程度）が官林に指定されました。その後、屯田兵村の設置、北越殖民社、広島団体移民などが入植、周辺の開墾が本格化し、明治末までに約2,200haの森林が農地に変換されています。

野幌の森は残されました

明治27年桜沢一番堤（桜沢の池）ほか7堤の造成が開始。

明治32年町村制施行に伴う、江別、広島、札幌への野幌官林分割払い下げ方針が北海道庁長官から出されますが、北越殖民社の関矢孫左衛門、広島の和田郁次郎などの反対運動で分割中止となりました。



野幌の森に新たな役割

明治41年札幌営林区署の国有林となり、野幌林業試験場が志文別に設置され、野幌国有林3,427haは全道の林業振興の付属試験林となりました。大正10年には、林内の一部トドマツ林（322ha）が史跡名勝天然記念物野幌原始林に指定され、道内有数の自然環境と認証され、昭和27年には、特別天然記念物（野幌原始林）に昇格指定されました。昭和11年、昭和天皇が北海道林業試験場を行幸し、野幌原始林内を大沢から中央線を通りトドロ口まで中央線を乗馬で散策し、途中休憩した所に「駐蹕（ちゅうひつ）の碑」があります。昭和28年北海道林業試験場が札幌に移転し、その後、林木育種場が開設されました。

戦後の野幌原始林

戦後の緊急入植者のため2,198haが農耕地として解放され、115戸が入植しました。昭和35年には、洞爺丸台風の被害のため特別天然記念物（野幌原始林）の一部が、そして昭和37年には野幌森林公園内の全てが解除され、園外の広島地域（40ha）に残すのみとなりました。

野幌森林公園の現況

昭和43年に、北海道百年を記念して道立自然公園野幌自然公園に指定（2,040ha、現在は2,053ha）されました。指定に先立ち、林内移民耕作地310haを公園用地として道が取得し、公園が整備されました。

昭和52年には、昭和天皇在位50年を記念して野幌自然休養林（公園内国有林）が「昭和の森」に指定されました。平成13年には、道民の自然観察の拠点として野幌森林公園自然ふれあい交流館がオープンしました。平成16年の台風の被害で70ha以上の風倒被害が発生し、翌年から市民との協働により風倒被害跡地を自然林に再生させる「野幌森林再生プロジェクト」が開始されました。

森林公園の植物

平成25年からの5年間の野幌森林公園における野外調査が取りまとめられた北海道博物館の研究紀要「野幌森林公園地域の種子植物相」によると、種子植物は570種が確認されています。他からの植栽植物を除外しても540種以上が存在しており、2,000ha以上の面積を有する野幌森林公園の自然は豊富なことが再認識されました。

夏を彩る花

オオハンゴンソウ

花は鮮やかな黄色で茎葉の姿は凛々しく、外形的には強い魅力的な植物で観賞用に導入された植物です。

倉本聰原作のドラマ「北の国から‘98時代」の正吉が蛍にプロポーズで、「百万本のバラ」の代わりに、近くに群生するオオハンゴンソウの花を毎日、蛍に贈るシーンがありました。今でも、道端で咲き、続々と開花してきます。繁殖力が旺盛で他の草花を駆逐し自然の生態系に影響を与えているため、「特定外来生物」に指定されており、全国各地で駆除作業が実施されています。当公園でも6月にボラレン、公園関係者、一般参加者などで拡大の抑制のための駆除作業を実施しています。しかし、今年は従来見られなかったモミジコースの遊歩道にもオオハンゴンソウが侵入する状態になっています。



セイタカアワダチソウ

空き地などに集団で他を圧倒する勢力で、花粉症の元凶だと誤解されたことで過大に問題視されましたが、虫媒花で今では無関係と考えられています。しかし、多年生草本であり、地下部からアレロパシー物質を分泌し、他の種子の発芽を抑制する（自身の発芽も抑制します）。このために純群落を形成して繁茂することから生態系に対する影響が強く、生態系被害防止外来種リストでは緊急対策外来種（旧要注意外来生物）に指定されています。非常に類似しているオオアワダチソウとの違いは、草丈が高く葉茎部が有毛でざらつき花期が遅いことで判断します。

オオウバユリ

開花時は清楚な出で立ちで、爽やかな香りを発するオオウバユリですが、開花後は次世代を育む種子の充実・撒布の期間です。多くの種子が遠方に飛翔するように茎は高く、下からの風のみを利用するシステムは巧みに作られており、種が遠方に飛散する仕組みです。開花には種子からで10年以上を、鱗茎に附着する娘鱗茎からでも3年を必要とします。地下部の鱗茎はアイヌ人の食料の供給源でした。時には、開花前に切断された茎が散見されますが、その食害は野生動物によるものと推測されます。

アケボノソウ（曙草）

初秋のゴールドスターと賞賛され、多くの方々が開花を待ち焦がれる人気の野花ですが、北海道の自然環境では生育がなかなか困難です。2年生草本で開花の時期が遅いため、発芽環境が不良で、かつ越冬前の生育確保が難しく、翌年の開花株が少ないと推定されています。しかし、花茎を伸長する株の近辺にロゼット状のアケボノソウの株が存在することがあります。その姿は極めてオオバコの葉に似ています。それらは結実数年後の今年に発芽した株で、来年開花します。今年アケボノソウの周辺に来年開花する株が存在しているのでしょうか。

観察会案内

8月19日（日） 苫小牧緑ヶ丘公園観察会 10:00～12:00 金太郎の駐車場集合・解散
9月 8日（土） 秋の花でにぎわう森を歩こう 10:00～14:30 自然ふれあい交流館集合・解散

<参考とした図書など>

・野幌森林公園（村野紀雄著）・森に生きる（井上元則著）・ネット情報（ウイパディア）

文責：三井 茂